

講座紹介

「シリア語（入門）」「西アジア古代帝国の盛衰」「天文学と占星術の始まり」

*Introduction of the Courses “(Introduction to) Syriac”, “The Rise and Fall of the Empires in the Ancient Near East”, and “The Beginning of Astronomy and Astrology”*

三津間 康幸 MITSUMA, Yasuyuki

東京大学大学院総合文化研究科学術研究員

筆者は 2018 年度前期, 東洋英和女学院大学六本木キャンパスの一角をなす大学院校舎で, 同学生涯学習センターの活動の一環として, 毎週火曜日に「シリア語」「西アジア古代帝国の盛衰」の 2 講座を開講している<sup>1</sup>。「シリア語」は後期にも開講予定であり, また「西アジア古代帝国の盛衰」は前期のみの講座であるが, 後期にはこれに代わって「天文学と占星術の始まり」を開講予定である。

「西アジア古代帝国の盛衰」は, 西暦紀元前 1 千年紀の各時代に西アジアの大部分を支配した, 新アッシリア, 新バビロニア, ペルシア, アレクサンドロス大王, セレウコス朝, アルシャク朝 (パルティア) などの諸帝国, 人物を取り上げて論じるものである<sup>2</sup>。アッカド語, アラム語, ヘブライ語, 古代ペルシア語, ギリシア語, ラテン語などで書かれた 1 次史料の日本語訳を提示しながら, 史料解釈上の諸問題を考察し, 史実へと迫っていく。特にアッカド語, 楔形文字で, 粘土板に書かれた史料が多く取り扱われる。写真 1 は史料について解説した初回講義の資料に掲載したもので, 楔形文字の点と線を (古代に実際に用いられた葦の茎の代わりに断面半円形の木の棒を使って) 粘土に刻む様子を示している。写真 2 は実際にアッカド語, 楔形



写真 1



写真 2

<sup>1</sup> 講座紹介は右記 URL を参照: 「シリア語」, [http://www.toyoeiwa.ac.jp/daigaku/shisetsu/syougai/cat65/ropponngi\\_spring\\_18..html](http://www.toyoeiwa.ac.jp/daigaku/shisetsu/syougai/cat65/ropponngi_spring_18..html); 「西アジア古代帝国の盛衰」, [http://www.toyoeiwa.ac.jp/daigaku/shisetsu/syougai/cat64/ropponngi\\_spring\\_39..html](http://www.toyoeiwa.ac.jp/daigaku/shisetsu/syougai/cat64/ropponngi_spring_39..html); 講座の申し込み方法は右記を参照: <http://www.toyoeiwa.ac.jp/daigaku/shisetsu/syougai/application.html>

<sup>2</sup> これら諸帝国の歴史については, 大貫, 前川, 渡辺 & 屋形 (2009); 小川 & 山本 (2009); シェルドン (2013) 参照。

文字の文章（『ハンムラビ法典』§196, いわゆる「目には目を」の部分）を紀元前2千年紀前半に用いられた古バビロニア書体で粘土に刻んだ模範例である<sup>3</sup>。写真3は「西アジア古代帝国の盛衰」における板書の一部で、新アッシリア帝国に対するナボポラッサルの反乱（新バビロニアの成立, 前626年）の経過を示している。

「天文学と占星術の始まり」では、前2千年紀から後1世紀までアッカド語で作成された、バビロニアやアッシリアの占星術・天文学文書の日本語訳を提示しながら、ティグリス・ユーフラテス両河地方において発達した天の科学の諸相を明らかにする。

「天文学と占星術の始まり」の最終回では、後2世紀後半から後3世紀初めに上部メソポタミアで活躍した思想家バルダイサンの思想を弟子が記録した『諸国の法の書』を取り上げ、その中に引用される占星術文書とバビロニア占星術との関係を議論する予定である。この『諸国の法の書』の記述言語こそシリア語であり、最後に紹介する講座「シリア語」で扱われる。

この講座ではシリア語の文法を Thackston (1999) に基づく日本語資料を用いて学んだうえで、解釈の比較的容易なテキストを講読する。講読するテキストは同書や、Muraoka (2005), 日本語で解説がある副読本 Ban (1993) に収録されているものから選ぶ<sup>4</sup>。図1は、*malyā allāhā*, 「主なる神」というシリア語を、セルト一体（西方書体）、東方書体、古典的なエストラングロ体の各書体で書いたものである<sup>5</sup>。

シリア語は少なくとも後3世紀から文学作品を残している言語であり、現代まで伝統が続く中東諸言語の文学の中で、シリア語文学はアラビア語文学、ペルシア語文学に次ぐ第3位の規模を持っているとされる<sup>6</sup>。そして、少なくとも紀元前5世紀にさかのぼる初期アラム語文学の中から、シリア語文学が『賢者アヒカル言葉』や旧約聖書のアラム語文書を継承していることは確実である。後200年ごろから700年までの500年間には、膨大なギリシア語文書がシリア語に翻訳された。後8世紀の終わりから9世紀初頭にかけて、バグダードのカリフたちが後援するアッバース朝翻訳運動が盛んになり、ギリシア語文書からアラビア語への

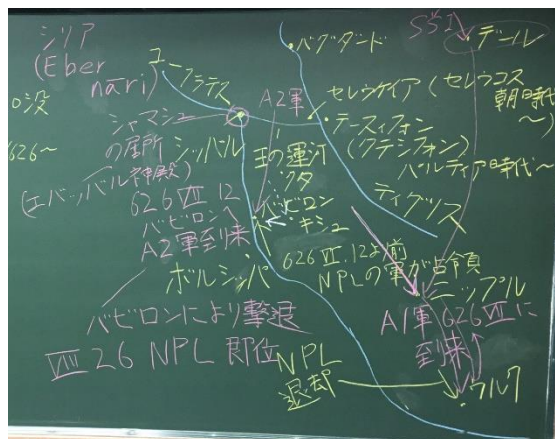


写真3

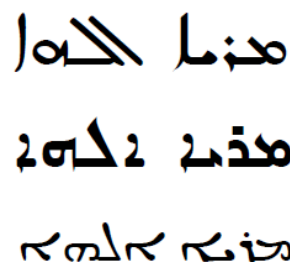


図1

<sup>3</sup> このような例にしたがって受講者が粘土に楔形文字を刻む実習は、朝日カルチャーセンター横浜教室における2018年6月の講座「バビロニアの文字を知る」で行った。講座案内は右記を参照：<https://www.asahiculture.jp/yokohama/course/e6d97035-7475-7131-71ca-5a5da5baf9d7>

<sup>4</sup> 副読本の紹介は、高階 (1995) を参照。

<sup>5</sup> シリア文字については、八杉 (2014), 28-29 も参照。

<sup>6</sup> ブロック (2006), 158。

翻訳が始まる。しかしそこでも多くの文書が一旦シリア語に訳されてからアラビア語に翻訳されたのである。ギリシア教父文書のシリア語訳の中には、ギリシア語ではもはや失われている作品からのものも含まれており、そのようなシリア語訳は初期キリスト教の研究にとって非常に重要である<sup>7</sup>。ギリシア語から（中期ペルシア語を経由してかもしれないが）シリア語に翻訳された作品には伝カリストテネス著『アレクサンドロス大王物語』のようなものも含まれる<sup>8</sup>。シリア語で生み出された作品にも重要なものが多数あり、たとえば後8世紀の『ズークニーン年代記』には世界最古のオーロラ図像が含まれ、天文学的に見て相当に価値が高い<sup>9</sup>。また後9世紀のフナイン・イブン・イスハークの医学に関する手引書は、シリア語の原典からアラビア語、ラテン語へと翻訳され、ラテン語訳は中世ヨーロッパにおいて標準的なテキストとなった<sup>10</sup>。

近代以前にシリア語文書・資料が残された地域は、東は中国から西はイタリアにまで広がっている。シリア語を典礼語とする東方教会の布教はユーラシア大陸の東端である中国にまで及び、後8世紀には西安の「大秦景教流行中国碑」に漢文と並んでシリア語文が刻まれた<sup>11</sup>。この碑は京都大学博物館にレプリカが所蔵されている。そして西方では、後14世紀初めにローマ教皇宛に送られた東方教会総主教ヤバツラーハー3世の書簡に、アラビア語の本文に先立ってシリア語の前文が記されている<sup>12</sup>。

シリアやレバノン、イラクなどのキリスト教徒は現在でも典礼語としてシリア語を用いている。インドにも南部のケーララ州を中心にシリア語を典礼語として用いるキリスト教諸教会が存在し、その信徒は数百万人に及ぶ<sup>13</sup>。このようにシリア語は、古代の文学伝統を受け継ぎながら重要な作品を生み出し、ユーラシアの東西に広く足跡を残し、いまなお一部キリスト教徒の典礼語として用いられている。聖書の本文批評を行う際にも、そのシリア語訳は参照系として重要な位置を占める。このように重要な言語であるにもかかわらず、シリア語が日本で教授される機会はいまだ少なく、大学でのクラス開講も、東京大学や大阪大学、北海道大学、東京神学大学など数か所にとどまる。筆者の「シリア語」講座は2015年度から継続して行っているものであるが、2018年1月からは朝日カルチャーセンター新宿教室でも隔週月曜日に「シリア語入門」を開講し、同様の学びの場を提供している<sup>14</sup>。今後もこのような活動をますます活発に展開していきたい。

筆者が紹介したような、大学生以外にも幅広く門戸を開く教養・語学講座は、数年間継続しての受講者と初めての受講者が入り交じり、各受講者に対してきめ細かい対応が要求される。特に「シリア語（入門）」のような語学講座はこの傾向が強いため、受講者とはメールで連絡が取れる

<sup>7</sup> ブロック (2006), 159-162.

<sup>8</sup> ブロック (2006), 164.

<sup>9</sup> 三津間 & 早川 (2017) 参照。

<sup>10</sup> ブロック (2006), 170.

<sup>11</sup> この碑文は佐伯 (1911), 125-133 を参照。

<sup>12</sup> 書簡については、Bottini (1992) 参照。

<sup>13</sup> 高橋 (2017) 参照。

<sup>14</sup> この講座には3か月単位で番号が付され、2018年7-9月の開講分は「シリア語入門 III」となる: <https://www.asahiculture.jp/shinjuku/course/89ddb51d-87ea-2f7d-496c-5ab0cfb65900>

ようにし、随時質問に応答したり、講義に関連する情報をやり取りしたりしている。このような情報交換により、授業での筆者の説明を改善したり、貴重な情報を入手したりすることも多い。様々なレベルの受講者に対応するため、「シリア語中級」のようなクラスを設けることも検討したが、そうすると受講者が分散して各クラスとも開講に必要な規定人数に達しない事態も想定される。今年度はある程度文法学習が進んだ段階で講読と文法学習を並行して行うなど、多様な受講者がそれぞれの力量に合った学びができるよう、配慮していきたいと考えている。

#### 参考文献一覧

- Ban, Kosai (1993) *Sylloge Sententiarum Syriacarum*. 四天王寺国際仏教大学アラビア語研究室.
- Bottini, Laura (1992) “Due Lettere inedite del patriarca Mār Yahbhallāhā III (1281-1317)”, *Rivista degli studi orientali* 66: 239-256.
- Muraoka, Takamitsu (2005) *Classical Syriac: A Basic Grammar with a Chrestomathy*, Second, Revised Edition. Wiesbaden: Harrasowitz.
- Thackston, Wheeler M. (1999) *Introduction to Syriac: An Elementary Grammar with Readings from Syriac Literature*. Bethesda, MD: Ibex.
- 大貫良夫, 前川和也, 渡辺和子 & 屋形禎亮 (2009) 『世界の歴史 (1) 人類の起源と古代オリエン  
ト』 中公文庫.
- 小川英雄 & 山本由美子 (2009) 『世界の歴史 (4) オリエン  
ト世界の発展』 中公文庫.
- 佐伯好郎 (1911) 『景教碑文研究』 待漏書院.
- シェルドン, ローズ・マリー (三津間康幸訳) (2013) 『ローマとパルティア: 二大帝国の激突三  
百年史』 白水社.
- 高階美行 (1995) 「Kosai Ban; *Sylloge Sententiarum Syriacarum*. 1993」 『オリエン  
ト』 38/1: 234-236.
- 高橋英海 (2017) 「インドの聖トマス・キリスト教徒」, 三代川寛子編著『東方キリスト教諸教会: 研  
究案内と基礎データ』 明石書店, 418-427.
- ブロック, セバスチャン (石渡巧訳) (2006) 「シリア語文学: 諸文化の十字路」 『アジア文化研究』  
32: 157-176.
- 三津間康幸 & 早川尚志 (2017) 「世界最古のオーロラ文字記録と図像記録」 『天文月報』 110/7:  
472-479.
- 八杉佳穂監修 (2014) 『ずかん: 文字』 技術評論社.

(みつま やすゆき 東京大学大学院総合文化研究科)